

“鳩”や“鶴”などの常用漢字表にない漢字は、幼児が覚えたとしても、役立たないではないか、という意見があるがどうか。

「常用漢字表にない漢字は覚えても役に立たない」と言いますが、“鳩”や“鶴”が本当に社会で全く使われていないと言えますか。“鳩山”“鶴川”という人名や地名はいくらでも見かけます。これを「表にないから読めなくてもよい」と言って済ますわけには行きません。覚えて役に立たないどころか、覚えなければ困る、というのが真実です。

しかし、「役に立つか立たないか」に関係なく、“鳩”や“鶴”を学習する必要が別にあるのです。“鳥”という言葉や漢字を学習し、“鳥”という漢字を学習する前に、“鳩”や“鶴”という言葉や漢字を学習しておくことが非常に大切なのです。

世の中に“鳥”という名の鳥は存在しません。また“鳥”の概念は、鳩や鶴という実在を通して初めて理解できるものです。

だから石井方式では、“鳥”という言葉も漢字も、“鳩”や“鶴”を学習しないうちに教えてはいけない、としています。

だから、鳩を見れば「あれは鳩よ」と言って教えます。また、漢字と

しても、“鳥”よりも“鳩”の方が覚えやすいのが事実です。

“鳩”や“鶴”という漢字は、実在を通して教えたら、二、三歳の幼児ならいっぺんに覚えてしまいます。

“鳩”や“鶴”を覚えたと、これらの字に共通した“鳥”に気づくようになります。この時、子供のその発見をほめてやり、“鳥”という概念を教えてやります。

こうして帰納的に“鳥”を理解した子は、“鳥”という字を演繹的に推理するようになります。推理力、洞察力の優れた子になるのです。